

当院における輸血副作用状況報告

県立奈良病院 中央臨床検査部

高木豊雅、永井眞美、川越善子、宗川 義嗣

平 康二（輸血部）

はじめに

2004年（H16年）3月に輸血システムBLAD（富士通）を導入し、同年6月より輸血副作用報告を開始し調査を行ってきたので報告する。

対象及び方法

2004年6月1日から2008年12月31日までに使用された輸血用血液製剤11409本を対象とした。

副作用の有無は製剤払い出し時に貼付する「製剤ラベル」（輸血副作用報告と輸血実施報告を兼ねる）に輸血実施者が記入し、返却されたものを解析した。

結果

全体では11409本中226本、1.98%に副作用がみられた。製剤別では赤血球製剤7001本中100本1.43%（発熱40.0%、じんましん17.4%、悪心・嘔吐9.6%、頭・腹・腰・胸痛2.6%）、濃厚血小板821本中45本5.48%（発熱8.2%、じんましん67.3%、悪心・嘔吐2.0%、頭・腹・腰・胸痛2.0%）、新鮮凍結血漿3587本中81本2.26%（発熱18.2%、じんましん22.6%悪心・嘔吐24.8%、頭・腹・腰・胸痛5.8%）であった。さらに白血球未除去製剤と白血球除去製剤（LR製剤）を比べるとMAP及びRCCでは4574本中64本1.40%、RCC-LRでは2427本中36本1.49%。FFP1及び2では2511本中44本1.75%、FFP-LR657本中17本2.59%、FF5 419本中20本4.77%であった。

この間に血液センターに副作用報告を行ない、検査を依頼したのは12症例で抗血漿蛋白抗体・抗HLA抗体を認めたものが各2症例あった。

考察

輸血システムの導入に伴い、全製剤の副作用報告を実施することでその実態を把握できた。今回は白血球除去製剤（LR製）による副作用の減少は認められなかったが今後も副作用報告を分析し臨床側へ情報を提供することにより輸血療法の安全性を高めるよう努めたい。